

京都で日本文学・日本文化を学ぶということ

赤間 亮

立命館大学日本文学会は、創設六〇周年とその学会誌である『論究日本文学』が一〇〇号に達したことをうけて記念のパネルディスカッションを開催した。以下、司会を担当したものとして総括を試みたい。

一 学域改革のなかで

六十年の歴史の中で、二〇一二年度に、この日本文学会の基盤となる文学部日本文学専攻に大きな改革がおきた。これは、日本文学専攻内部からの改革ではなく、いわゆる学部改革に伴うものであった。文学部は、哲・史・文という人文科学の根幹学問を柱に置いた枠組を守りながら、地理学、心理学、教育学などの新たな学問を組込んで拡大してきた。それを、今回の文学部改革では、学域という言葉を使い、学問領域と対象地域の両義の「域」によってグルーブ化したものである。

我が日本文学専攻は、“日本学域”として、たとえば日本史とグルーブ化されそうなものであるが、そうならず日本文学の発

展型としての“日本文学研究学域”として独立した学域となった。これには様々な事情があったと思われるが、立命館文学部の花形専攻である日本文学と日本史とがもしも合同した場合に、巨大な学域となつてしまい、機動性に欠けるといふ点が大きかったはずである。

この改革では、日本文学研究学域の他にも一つ親和性の高い学域が成立している。地域研究学域であり、従来の専攻名で言えば地理学専攻が核となる。これに、日本文学専攻の教員一人でもあつた木村一信先生の学部長時代に立ち上つた「京都学」が加わっている。京都学とはまさに地域学であるが、京都は日本文学にとつてもきわめて重要な土地であり、まさにキーワードである。現在も、この専攻に日本文学研究学域から一人の教員を“貸出し”ており、飛地のようになっている。

こうした、従来と違う枠組によって文学部再編をせざるをえなかった背景については、ここで詳述するつもりはない。が、少なくとも領域間にいつの間にかできてしまった厚い壁を取除き、インターディスプリナリーな学部として再生させる動きが、立命館

文学部でも一九九〇年代後半から進んでおり、ようやくそれを実現できたと言った方がよいのかも知れない。

二 学際化と日本文学研究

こうした学問領域の再編成の中で、改めて日本史学や地理学と、日本文学との違いを考える機会が与えられたことを積極的に評価する必要がある。本シンポジウムのパネリストとして登壇いただいた中本大氏は、まさに地域研究学域京都学専攻に移籍して、歴史地理学の学際的な研究方法を意識しながら、京都学の中での日本文学の位置を探り当てんとして奔走された。今回、そうした試みの貴重な体験の上で発表されたのが、「文学研究は「京都」に学べるか」である。

冒頭で、「歴史学研究者が文学研究の動向に冷淡なこととはよく分かっていた」とあるのは、歴史的事実を説明することで真理にたどり着こうとする歴史研究のベクトルと、虚構の中にこそ表現される真実を追究する文学研究のそれとの力学の違いを率直に述べられたのであろうが、地理学も地理的な情報を研究の基盤とし科学的に正確であることを目指す学問である以上、現実にはあり得ない、まさに歪んだ架空の地理空間をいとも簡単に作り出す文学の営みとの相性の悪さは覆うべくもない。

事実としての京都（を）学ぶのではなく、表象された「京都」（に）学ぶというタイトルによって、日本文学という学問領域に

おいて京都学を設定した時に、歴史学や地理学とは違うスタンスとならざるを得ないことを、中本氏は明確に示したのである。

もう一人のパネリスト楊曉捷氏が、中本氏も取上げていた『徒然草』の引用から話題を展開されたことは興味深い。両氏が奇しくも共通して指摘したように、「京都」は、相対化された時にその懐の深さが際立ってくる。「京都」には、多かれ少なかれ京都とかかわった、あるいはかかわりたい人々の記憶や想像力が蓄積されていくからである。

文学作品の中では、事実としての地理情報も時間情報も極めて曖昧である。学際的な学問の協働を目指すときに、立命館の文学部の再編で行ったような地域学によって構成された場の中では、実は異領域であるからこそ文学研究の存在が際立つことになる。「つくりもの」を対象とする「文学」研究——これは恐らく美術や音楽、さらには建築も含めた表象領域も同様であろう——の意義がはっきりと示されるべき時がきたのだという自覚を促す重要な発言となろう。

三 デジタル環境と日本文学研究

パネリストとして海外からお呼びしたカルガリー大学教授の楊曉捷氏は、京都大学で学ばれ、中世文学、とりわけ軍記物に含まれる説話の研究により博士号を取得された。その後、絵巻の研究に重心を移し、さらには、デジタル環境の中で人文学がどのよう

に生かされていくのかについて、様々な発言をされてきた。著書に、『鬼のいる光景』（角川書店、二〇〇二）、『デジタル人文学のすすめ』（勉誠出版、二〇一三）などがある。

楊氏は、ご自身の京都大学時代の研究体験を東京や海外での研究と相対化してお話になった。京都では、自分の研究課題の決定には自らが責任を負うこと、それ故に身軽な研究分野の越境が容易となること、そしてそれを許容して受け入れる懐の深さが京都にあることを指摘された。ご本人も、京都大学時代は軍記物研究であったのが、海外での研究生活のなかで絵巻のカラー印刷出版という研究環境の革命にしたがってテーマを移されたが、それでもなお、このテーマをまとめるための研究の拠り所は京都にあった。さらに十年余を経て、今度はデジタル環境というメディア革命の中に過す中で、考察を深めてきたデジタル人文学という新しい学問領域での成果を、やはり京都（国際日本文化研究センター）に滞在してまとめることができたという。

ところで、日本文学研究学域の内部にも、文学部の学域改革によつて新しい動きがあった。学域には、従来の日本文学専攻に加えて新たに日本文化情報学専攻を設置することになったのである。文化情報学は、欧米の人文学研究では今や一つのトレンドとなっているデジタル・ヒューマニティーズを意識したものである。

日本文化情報学専攻では、これを日本語学・日本文化研究・図書館情報学を柱とした、日本文学を成り立たせる環境学であると

説明している。現在の文学環境は、いわばデジタル環境の真つただ中にある。メディアの歴史を辿れば、紙の発明や印刷技術による革命がいかに人類を進化させたかが分かる。その後、映画や放送、電子媒体などヴィジュアルなメディアの発明と普及をみたが、それらのインパクトを遙かに凌ぐインターネットという大革命の中で、文学の需要のありかたも大きく変わった。紙の上に文字で記録されてきた文学を中心に捉えることはもはや不可能である。それ以外の表象分野も、デジタル環境の中では横一線に並んでいる。これらは、すでにデジタルアーカイブとして、図書館や文書館・博物館の規模を越えて提供されている。メディアやアーカイブは、文学の環境研究としてもはや避けては通れない対象となっているのである。

楊氏の研究テーマの推移は、日本文学にかかわる研究資源の入手に困難が伴う海外の研究環境にいるからこそ導かれたものであったろうが、京都は、そのデジタル・ヒューマニティーズ型研究を受入れることができたし、立命館も他大学に先がけて、しなやかに日本文学研究の中にデジタル・ヒューマニティーズを持込んでいた。これも京都の懐の深さ故であろうか。

四 グローバル化と日本文学研究

グローバル化は、日本文学・文化研究分野にも徐々に影響を及ぼしてきた。グローバル化とは、文化の分野ではアメリカナイズ

と同意語のように考えて危機感が煽られていたのは過去のこと。グローバル化は、インターネットのような時空を瞬時に越える情報アーカイブの中において、ローカル文化をロングテールとして吸収した。しかも、国家の枠組を越えたグローバル文化の中では、その一つ一つが重要な構成物として位置づけられることになった。それらはグローバルな人類の財産として認められることになったのである。

日本文学・日本文化を日本人のために学ぶという時代は終わった。孤立言語と言われる日本語環境の中で生み出された日本文学や日本の文化ではあるが、いったん日本語を学んだり、あるいは漫画やアニメを通じてでも日本の文化に関心を持った世界の人々からは、現実の日本をはるかに凌駕した規模で、表象された「日本」が拡大しつづけている。なぜなら、文化国家「日本」が魅力的であるからである。海外からの訪問者が、なんとかして「京都」や「日本」を捉えようと躍起になっているときに、京都で学ぶ我々が、日本文学を学ぶ意義を見失う必要はなからう。

シンポジウムのディスカッションでは、留学生からの発言も求めたが、とりわけグローバル化時代の中で、日本文学研究の中心は、すでに日本国内だけに限定されるものではないことを認識できたのではないかと思う。我々の日本学域で学ぶ人材の活躍の場はすでに世界に開かれているのである。

(あかま・りょう 本学教授)